

乳児院における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケアに関する実地調査研究

大迫 秀 樹・白 澤 早 苗

Psychological care with continuity from an early stage associated with downsizing, regional decentralization, high functionality, and multi-functionality in home for babies through the field interview survey

Hideki Osako・Sanae Shirasawa

キーワード：乳児院、早期からの連続性を持った心理的ケア、小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化

I 問題の所在

児童虐待に関する相談処理件数は依然として、高止まりしている。子ども家庭庁が発表した全国の児童相談所における児童虐待の処理件数は、2022年度には219,170件（速報値）となっており、対前年度比で+5.5%（11,510件の増加）（子ども家庭庁、2023）であり、過去最多となった。これは、児童虐待の相談処理件数に関する統計を取り始めた1990年度（当時は厚生労働省）の全国の認知件数である1101件と比較すると、約200倍にものぼり、膨大な数となっている。このことは、それだけ社会の関心や意識が高まっていることを示していると考えられ、極めて重大な課題だと考えられる。

児童虐待への対応としては、児童の健全な発達を保障するためには、家庭から分離せざるを得ないと判断された場合には、児童相談所による一時保護等を経て、乳児院や児童養護施設、児童心理治療施設、児童自立支援施設等の児童福祉施設への入所措置、あるいは里親への委託措置が取られることとなる。児童虐待は、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を引き起こすということが、日本では、1995年の阪神淡路大震災などを契機として、強く認知されるようになり、施設入所後の子どもたちに対する施設での心理的なケアの重要性が強く意識されるようになってきた（Gil,E., 1991; 西澤、1999; 安倍、2001; 大迫、2001など）。しかも、1999年には、児童養護施設に非常勤の心理職を配置するという取り組みが始められることとなった。さらに、2001年には、乳児院や母子生活支援施設、2006年には、児童自立支援施設等の児童福祉施設における心理職の配置も始まった。このようなことを背景にして、この領域における心理的ケアや心理職の在り方等に関する実践と研究が進み始め、心理学関連の学会誌等

での発表なども進むようになってきた（例えば、坪井、2004; 古谷、2006; 藤澤、2012; 井出、2012; 加藤、2012; 檜原・増沢、2012など）。

虐待を受け、社会的養護を必要とする子どもたちへの心理的支援を考える場合には（里親や保護者への支援も含む）、主たる対象者である子どもたちは、当然のことながら、可塑性に富む存在であることから、早めに心理的ケアを含む適切な対応を行うことが必要である。したがって、乳幼児期というできるだけ早期からの連続的な視点に立った上での有効な方策の確立が重要であると考えられる。

それを受けて、大迫・白澤（2019a, 2019b）では、全国の乳児院、児童養護施設を対象にして、大規模な質問紙調査を行い、乳幼児期という早期の時期からの連続性を考慮した上での心理的ケアについての解明を試みた。その結果からは、乳幼児期という早期からの連続性を持った心理的ケアの必要性を認識している施設が少なくないことが認められ、具体的には、ライフストーリーワークの考え方などを基にした取り組み、里親養育への繋ぎを重視した里親支援の取り組み等が工夫されていることが明らかにされた。

更に、質的な面から調査分析を行うために研究を進めて、施設での実地調査を実施した。その結果、乳児院については、実地調査により、「乳幼児への養育における心理面での繋ぎ（連続性を持った心理的ケア）」に関しては、①入所後の親との関係性への配慮、②措置変更前の慣らし保育の重視、③措置変更後の事後訪問、里帰り行事等の重視、④乳児院・児童養護施設における乳幼児の対象年齢の変更（平成16年[2004年]、児童福祉法改正）の有効性、⑤語りかけや告知（“telling”）の必要性、重視の考え、⑥育てアルバムの作成の重視、⑦家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員の役割の重要性など、

おおむね 7 項目の重視されている、あるいは有効だと考えられる視点が示された。また、「心理職」に関しては、①客観的な立場からの見立ての必要性、②コンサルテーション、チームアプローチの重視、③研修やSVの充実など、おおむね 3 項目の重視されている、あるいは、有効だと考えられる視点が示された（大迫・白澤、2021）。

また、児童養護施設については、「早期からの養育における心理面での繋ぎ（連続性を持った心理的ケア）」に関して、①生い立ちや家族について日常的に触れることができる環境の調整、②併設施設における乳児院・児童養護施設間の交流の重視（乳幼児合同ユニット等を含む）、③併設施設でない場合の連続性への配慮、④家庭との繋ぎへの配慮、⑤兄弟関係への配慮、⑥幼児期からが学童期へのつなぎへの配慮、⑦家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員の役割の重要性及び施設の里親支援機能の充実など、おおむね 7 項目の重視されている、あるいは有効だと考えられる視点が示された。また、「心理職」については、①生活に関わることで、タイムリーな支援や支援のアイデアを得ることが可能となるという利点、②個別面談によるトラウマケアなどのほか、集団も含めて、SST、性（生）教育、セカンドステップ、ライフストーリー的な取り組みの必要性、③生活職員との協働における、客観的な見立てができること、コンサルテーションにより生活担当職員のかかわりの質が上がる、メンタル支援もできること、心理職が入ってから繋ぎを重視する土壌ができてきたという変化など、おおむね 3 項目の重視されている、あるいは有効だと考えられる視点が示された（大迫・白澤、2022）。

さて、これらの研究により一定の成果を得たものの、さらなる課題にも直面することとなった。厚生労働省（当時）は、家庭的養護を推進していくという方向性を示しており、乳児院や児童養護施設等の児童福祉施設においては、小規模化や地域分散化の流れが進みつつあったのだが、そのような時期に行われた研究では、調査の時点に比して、その前ほんの数か月～1、2 年程度の間に小規模化ユニット等への建て替えが済んだ施設も少なくないことが明らかになった。そして、大規模な形態から、小規模化への移行が進んだ施設においては、例えば、「小規模化になるほど、子どもの声が大きくなる。生い立ちに対する疑問の声も出てくるようになった。そのため、丁寧な対応が必要である」などとする意見も少なからず聞かれた。そして、その対応のためにもライフストーリーワークの考え方を取り入れた等の

意見などもあった（大迫・白澤、2022）。そのことから、小規模化に伴う子どもの様子と職員の変化に関する継続的な調査の必要性が感じられた。また、あわせて進行中であった里親養育の方向性の点からも、里親との良い関係性を作り、継続支援している施設もあった。子ども自身の人生のつながりを考えるならば、里親養育という点でも、里親を支援する人や機関が必要であり、協働して養育にあたるという施設の役割が求められる。つまり、施設の高機能化・多機能化に関する取り組みの強化も極めて重要だと考えられた。

このことから、施設の小規模化や里親養育等の方向性に沿った上での乳幼児期からの連続性を持った心理的ケアのあり方の探求が非常に重要な課題であることは明白であり、施設の高機能化や多機能化に伴う役割の変化等も踏まえつつ検討する必要がある、施設形態は、まさに、大きく変革していく時期にあたることから、継続的な調査研究が求められる。その際には、小規模化に加えて、より一層の家庭と同様の環境での養育、すなわち里親養育の推進という方向性（2017 年 8 月「新たな社会的養育ビジョン」等）を受けた上での、里親支援、里親家庭等との協働、保護者支援、専門性の発揮、地域支援等の新たな施設の役割（高機能化・多機能化）に関する検討を行っていく必要があると言える。

以上のことから、①施設の小規模化、家庭的養護の方向性（地域分散化含む）からの連続性を持った心理的ケアのあり方、②家庭と同様の環境での養育の推進を踏まえた上での里親支援・協働等を中心とする施設の新たな役割（高機能化・多機能化）の 2 点の解明を大きな目的として、これ迄に、全国の乳児院対象の調査（大迫・白澤、2023）、児童養護施設の調査（大迫・白澤 2024）において概略を把握してきた。

その結果からは、最も重要な視点であった乳幼児期からの連続性を持った心理的ケアについては、多くの施設において、施設内、および関係機関との間において、繋ぎの意識を持ちながら、重要な課題として取り組んでいることが明らかとなり、その継続性、発展性が認められた。また、小規模化を中心とする視点では、おおむね愛着形成などにおけるメリットの大きさは感じられていたが、職員の交代による喪失体験が大きいことや職員の勤務上の過重負担などのデメリットもあることが分かった。里親支援を含むところの施設の高機能化や多機能化をめぐる視点では、特に乳児院においては、比較的積極的に取り入れられているのに対して、児童養護施設

においてはやや消極的であることが認められた。さらに、心理職の役割等に関する視点においては、多くの施設において、心理職が配置されてからの年数が徐々に経過する中で、心理職の勤務経験が長くなり、力量を高めていくなかで、施設における心理職の役割、あるいは心理的なアプローチへの理解が深まり、施設全体として心理的なケアに関する意識が高まっている等、非常に望ましいと考えられる傾向も認められた。一方で、生活職員とのコミュニケーションの取り方の難しさがあり、施設において心理職としての立ち位置に困難があること、また、一人職場であること、勤務日数が短いこと等により、十分力を発揮しにくいという傾向もあった。

ただし、この調査はあくまでもアンケート調査であることから、施設の立地や文化、風土などに応じた個別の事情に即した点を把握することは難しかった。そのため、今後は、可能な限り、各施設の特徴に応じた有効な取り組みなどを、実地訪問などによって調査し、その結果を積み上げ、集約することで、この領域における子どもと職員にとって有用な方策などを、現場とも共有しながら、提案、提言に結び付けていくことができることが必要だと思われる。

このことから、本研究では、具体的な内容をより詳細に調べるために、施設側の協力を得て、乳児院における実地インタビュー調査を行い、早期からの連続性を持った心理的ケアを行う上で、現在の小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化等、児童福祉行政（国）が目指している方向性がどのように影響しているのかについて、質的な点から明らかにしていくこととしたものである。

II 方法

1 調査対象

対象は、全国の乳児院139箇所を対象としたアンケート調査（2020年実施）において、訪問による実地インタビュー調査に協力可能と答えた施設から7箇所を選定して行った。

インタビュー調査の対象は、施設長、副施設長、主任、家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員（管理的あるいは全体を知る立場にある者）、及び心理職、保育士、児童指導員、看護師であった。施設の事情等により協力が可能な対象者へのインタビュー調査を行ったので、施設によって人数は異なっている。対象者の総数は15名であった。各施設毎には、1名～4名の協力を得ることができた。

2 調査時期

2022年3月～2023年3月にかけて、研究代表者が実地（施設）に赴く形で実施した。

3 内容

いずれの対象者に対しても、乳幼児への養育における心理面での繋ぎ（連続性を持った心理的ケア）に関する取り組みについて、特に小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化（近年、施設に求められている里親支援[フォスターリング含む]等）を踏まえたところでの活動内容、課題点などについて、できる限り質問内容は固定せず、自由に語ってもらおうという形式で、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。面接内容は、許可を得てICレコーダーにて録音した。

4 倫理的配慮

事前に研究代表者の所属する大学における倫理審査を受け、承認されたのちに実施した。実施に当たっては、臨床心理学領域における倫理的配慮に基づき、インフォームドコンセントの手続きを経て実施した。対象者には、書面による承諾書への記入を求め、了承を得た上で実施した。

III 結果と考察

聞き取り結果をもとに、乳幼児への養育における心理面での繋ぎに関する活動内容、課題点などについて小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化を踏まえ、また、施設の状況等も踏まえ、個別性に配慮しつつ、施設が特定されることのないように、語られた内容や資料等を分析した。その際には、KJ法を分析の参考として活用した。各施設の状況が異なることからその語りから聞き取ることができた内容について、単純にデータ数などだけを基準にするのではなく、その重要性などを十分に考慮しつつ分析を進めた。最終的に、非常に重要だと思われる点を抽出してまとめると以下の13項目が挙げられた。

1 子どもの育ちをつなぐライフストーリーワークの実践の重視

子どもの育ちをつなぐ（養育の連続性を保つ、生い立ちを知る権利の保障をする）という点で、施設によって始めた時期は異なり、また取り組みの程度も違いはあったものの、全ての施設においてライフストーリーワークの考え方に基づく取り組みが重視されていることがうかがえた。前回の実地調査は、2016年から2017年にかけて実施したが（大迫、白

澤、2021)、今回の調査に当たっては2回目の調査となった施設もあり、特に、そのような施設においては、前回の時点での取り組みをさらに充実している傾向が強く感じられた。また、今回初めての調査となった施設においても、前回の時点では取り組み自体が始まっていなかったが、今回の調査で、その考え方（ライフストーリーワーク）の重要性から、比較的近年に取り組みを始めたという傾向が強かった。これらのことから、「子どもの育ちをつなぐーライフストーリーワークの実践の重視」ということが全体的に浸透していることが伺えた。その心理的な意味の重要性についての指摘がなされており（山本智佳央・檜原真也・徳永祥子・平田修三、2015）、今後もその流れが進んでいくのではないかと考えられる。

2 養育環境の安定性を保つ工夫（縦割り保育を重視するといった取り組みなど）

乳児院において、子どもたちが在院する期間は2、3年と短いので、養育の環境（同じ場所）を変えず、養育者が変わらない縦割り保育を重視しているとするなど、環境と養育者の安定性・連続性に配慮しているという施設もあった。確かに、乳児院に在院する時期は、ボウルビィによる愛着理論では、愛着形成における非常に重要な時期だと言える。また、愛着対象は特定の者であることも重要であるとされる。乳児院では、担当養育制をとっている場合も多いが、さらに、できるだけ年度が変わっても養育者あるいは環境も含めて変わらないという取り組みは、愛着形成を促し、安定した心の発達にとって非常に重要であると考えられる。

3 アルバムや「telling絵本」等の作成の重視

「つなぐアルバム」、「育ちアルバム」を作成し、成長の過程を伝えることができるような取り組みをしていた。また「telling絵本」を作成して、未来につないでいくための語りという形で整理しているという取り組みが多く実践されていた。この点においても、前回の2016、2017年の実地調査（大迫、白澤、2021）から、2回目の調査となった施設では、前回の時点での取り組みをさらに充実している様子であった。例えば、実親による養育困難から乳児院措置、その後里親委託となったケースなどでは、なぜ自分が乳児院に入所したのか、そしてなぜ里親の所へ委託となったのかということを、その時の自分や取り巻く大人の様子（感情を含む）を含めて絵本としてまとめ上げ、子どもに伝えていくという取

り組みを、より丁寧に実施している傾向が認められた。子どもの育ちをつなぐという視点から、非常に重要な取り組みだと考えられた。

4 措置変更前の慣らし保育の重視

児童養護施設等へ措置変更の場合の事前の慣らし保育については、ほとんどの施設が重視していた。以前に比べて、児童養護施設側の理解や受け入れもかなり自然な形で進むようになってきたという意見が非常に多く認められた。これは、やはり子どもたちの心理的な発達面の重要性が強く認識されるようになり、子どもの育ちをつなぐという視点の重要性が強く認識されるようになったことなどが背景にあると思われる。なお、ちょうどコロナ感染症拡大の影響を受けた時期だったこともなり、受け入れ先の児童養護施設とは、事前に、オンラインを活用し、かつ、適宜、対面での直接の慣らしも併用して実施したというケースもあった。様々な工夫が広がっていることが感じられた。

5 措置変更後の事後訪問、里帰り行事等の重視

児童養護施設等への措置変更後に、乳児院の担当者が事後訪問を行うこと、あるいは児童養護側からは施設の職員が乳児院に連れて帰る「里帰り行事」等もほとんどの施設で実施されていた。また、里親への措置変更の場合にも同様の取り組みを実施するという話も聞かれた。子どもにとっての自分の育ちを確認し、その後につなげていくという意味、つまり、養育における連続性を保つという視点において非常に重要だと思われる。

6 併設の児童養護施設との連携の重視

同一法人によって、児童養護施設と乳児院が併設されている施設もあったが、その場合には、特に、心理職の配置などを契機に、育ちの連続性を保つための取り組みが重要だという意識が高まり、支援向上のための委員会の設置などにより、その取り組みが進んだという話が聞かれた。乳児院と児童養護施設という双方の施設に複数の心理職を置いているという施設（法人）もあり、心理的ケアの視点が重視されていた。心理職が施設に配置されてから久しいが、その効果の一つとして特筆されると思われる。

7 語りかけ（“telling”）の必要性、重視の考え

“telling”とは、語りかけや告知をも含んだ概念であるが、養育場所の変更などに伴って子どもに生じる気持ちや成育史にかかわる話題などを、養育者が子

どもにわかる言葉で語りかけることを積極的に取り入れている施設もあった。その場合には、外部の大学教授によるSV（スーパーバイズ）を通じて実施しているということであった。子どもであってもその状況を理解する力はある、そのことを言語化しながら明確化するということは、ひいては、子どもの人生をつなぐということにつながる重要な取り組みであり、子どもの権利を擁護する取り組みだと思われる。

8 小規模化によるメリットとデメリットへの対応

小規模化を実施した場合、丁寧にかかわることができるため子どもの安定につながるというメリットを強調する意見がおおむね聞かれた。ただし、一方で、職員の抱え込み、孤立化などのデメリットが発生する場合もあったり、子ども同志でのトラブルが頻発する場合には、環境が閉じているだけに問題が大きくなることもあるとのことであった。そのため、ある施設においては、昼間は小規模での養育を実施するが、夜間は大舎での運用として、職員間の協力体制に十分に留意しているという施設もあった。この点は、課題でも述べるが、おおむね子どもにとってのメリットがある反面、職員にとってはデメリットとなることもあり、想定されるリスクにどのように対処するか備える必要があると考えられる。

9 一時保護機能やショートステイ機能の充実

乳児院には、児童相談所での乳幼児の一時保護が難しい場合も少なくないため、そのようなケースでは乳児院での一時保護を依頼されることが一般的である。その場合に、本体施設の入所児童と一緒に生活空間で対応する場合もあるが、施設によっては、一時保護施設（棟）を専用で設置し、心理職も専属で配置するなどして、アセスメント機能を充実させているという施設もあった。この機能の設置により、本体施設の子どもたちが落ち着くというメリットもあるとのことであった。この点は、今後の多機能化、高機能化に向けて非常に重要な点だと思われる、一つの在り方として特徴的な取り組みだと感じられた。

10 保護者支援の重視

乳児院に措置された子どもが家庭に引き取られる場合も多いため、保護者への支援は、非常に重視しているとのことだったが、施設によっては、いつでも面会ができるだけでなく、面会室ではなく、生活

場面での面会を設定することで、担当の保育士との関係もつなぐことを重視している施設もあった。さらに、家族支援棟を設置し、心理職が、保護者等への養育訓練プログラムを実施しているという施設もあった。乳児院養育指針でも保護者との連携は非常に大切な課題であるとされている（全国社会福祉協議会・全国児福祉協議会、2009）。保護者の中には、自身が不安定な家庭環境で育ち、養育力に乏しい場合も少なくないため、その点をフォローしていく取り組みの工夫として、やはり非常に重要だと思われる。

11 地域支援や里親支援の充実

里親支援機関の運営を行っている施設もあり、心理職を配置してマッチング支援やアフターフォローを充実させている施設、また、里親支援機関が県内の里親支援を総括する役割を担っているというところもあった。さらに、市役所との連携の重視、あるいは子どもを地域の保育園などにつなぐ場合の工夫（子どもの特徴をわかりやすく示す資料の作成等を実施）への配慮がある施設もあった。まさに、乳児院の多機能化、高機能化の実践例として、しかも現代社会に適合した非常に重要な取り組みだと思われる。

12 心理職の役割の大きさと施設の理解の進展

心理職が、子どもの育ちをつなぐために、生活担当職員に対する適切なコンサルテーションを行った、乳幼児期の子どもの気持ちをすくいあげるような丁寧な個別の心理療法を実施するなど、その対応が充実してきていることが伺えた。また、保護者支援、地域支援、里親支援などにおいても、心理職の活動が大きなプラスとなっていると思われる。もちろん、このことは心理職単独でなしえることなく、施設長をはじめ、多職種による理解と支えがあつてのことだということがうかがえた。乳児院に心理職が配置されるようになってから約20年を経過する中、その成果が大きく表れていると考えられた。

13 課題について

先述したように、小規模化を実施した場合、丁寧にかかわることができるため子どもの安定につながるが、一方で、職員の抱え込み、孤立化などのデメリットが発生する場合もあり、特に職員の協力体制やひいては育成などが大きな課題だという意見が非常に多かった。この点では、今後、特に施設全体で

職員間の風通しを良くして、コミュニケーションを活発にすることであったり、全体を見渡しながら、調整する役目を持つ管理職が適切に対応することなどが重要だと思われた。ひいては、職員のメンタルヘルスなどへの配慮も必要だと思われた。

IV 総合考察とまとめ

子どもに対する虐待は、乳幼児期といった人生の初期から発生していることも少なくなく、その心理的なダメージは重篤であることから、心理的ケアは、乳幼児期という早期から、しかもその後の人生の連続性という視点を考慮した上で実施していくことが極めて重要である（渡辺、2003；南山・青木、2012；山本、2012；友田、2017）。しかも、深刻な虐待を受けた子どもたちは家庭分離により、児童福祉施設に入所することも少なくなく、施設におけるその心理的ケアの状況を明らかにするために、全国の乳児院、児童養護施設を対象にした質問紙調査（大迫・白澤、2019a, 2019b）、および実地調査（大迫・白澤、2021, 2022）を実施してきた。さらに、その後、施設の小規模化や里親養育等の方向性に沿った上での乳幼児期からの連続性を持った心理的ケアのあり方の探求が、非常に重要な課題であり、しかも、施設の高機能化や多機能化に伴う役割の変化等も踏まえつつ検討する必要性が明白になってきた。特に、より一層の家庭と同様の環境での養育、すなわち里親養育の推進という方向性（2017年8月「新たな社会的養育ビジョン」等）を受けた上での現場における影響と変化を把握する必要が求められた。そのことを踏まえて、これ迄に、全国の乳児院対象の調査（大迫・白澤、2023）、児童養護施設の調査（大迫・白澤2024）において概略を把握し、全体的な流れとしては、小規模化の進展に伴っても、早期からの連続性を保つような心理的ケアの考え方がより一層、重視され、また高機能化、多機能化も進展していることが伺えた。その上で、今回の質的な調査により、施設の個別性などに基づく具体的な内容を把握することを試みたものである。

今回調査を行った各施設においては、体制や形態、背景となる文化や地域性も様々であり、一概にまとめることは困難である。その中で、国が掲げる養育の方向性等の状況を鑑みながら、非常に熱心な取り組みと現場での努力がなされていることは言うまでもなく、最新の社会福祉学や心理学における知見などを統合しつつ、貴重な実践が蓄積されていることが分かった。特に、子どものアイデンティティの獲得などにつながるという点で極めて重要な「育

ちをつなぐ（ライフストーリーワーク）」という視点（Rose, R. & Philpot, T., 2005；檜原、2015；山本・檜原・徳永・平田、2015；大迫、2017）が、心理職の関与の影響などもあり、大変重視されていることが明確となったと考える。また、そのための具体的な取り組みが進んでいることがわかった。

引き続き、子どもの発達を支えていくような取り組みの進展と、関与する職員が疲弊することなく、高い達成感や満足感を保ちながら仕事に臨むことができるような環境整備が進んでいくことが期待された。そのためには、地域の関係機関や専門職との連携による支援の充実、あるいは、国や自治体が定める政策対応による支援なども重要であると考えられる。

今後も、各施設の特徴に応じた有効な取り組みなどを積み上げ、集約することで、この領域における子どもと職員にとって有効だと考えられるような方策を、現場とも共有していく必要がある。その際には、青木（2012）が指摘するような生活臨床という視点を大事にする必要があるだろう。そして、そのような知見を、可能な限り、広く現場での実践に取り入れていくことや、今後も、国や自治体が進める政策対応などにも、できるだけつなげていくことができることができるようにする必要があるだろう。今後も、現場と研究者が一体になって取り組んでいくことが極めて重要だと考える。

<付記>

研究を進めるにあたり、協力をいただきました当該乳児院の施設長をはじめとする皆様方には、心より深く感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は、第21回日本福祉心理学会（日本福祉心理学会事務局：オンライン）にて発表した。また、本研究は、JSPS科研費18K02095（研究代表者：大迫秀樹、研究分担者：白澤早苗）の助成を受けて実施されたものの一部である。

<文献>

- 安倍計彦（2001）：ストップ・ザ・児童虐待：発見後の援助．ぎょうせい．
- 青木紀久代（2012）：生活臨床における関係性援助への心理臨床的接近．増沢高・青木紀久代（編），社会的養護における生活臨床と心理臨床．福村出版，70-83．
- 藤澤陽子（2012）：児童自立支援施設における生活臨床と心理職の役割．増沢高・青木紀久代（編），社会的養護における生活臨床と心理臨床．福村出版，131-142．
- 古屋肇子（2006）：乳児院における心理療法と愛着形成——対一の関わりという枠の大切さ．第25回日本心理臨床学会発表論文集，173．

- Gil,E. (1991) : The Healing Power of Play : Working with abused children. New York :Guilford. (西澤哲訳 (1997) : 虐待を受けた子どものプレイセラピー. 誠信書房.)
- 井出智博 (2012) : 児童福祉施設における心理職の現状. 増沢高・青木紀久代 (編), 社会的養護における生活臨床と心理臨床. 福村出版, 41-57.
- 加藤尚子 (2012) : 児童養護施設と施設心理士. 加藤尚子 (編著), 施設心理士という仕事ー児童養護施設と児童虐待への心理的アプローチ. ミネルヴァ書房, 1-36.
- 子ども家庭庁 (2023) 令和4年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値) https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/a176de99-390e-4065a7fbfe569ab2450c/12d7a89f/20230401_policies_jidougyakutai_19.pdf
- 南山今日子・青木紀久代 (2012) : 乳児院における生活臨床と心理職の役割. 増沢高・青木紀久代 (編), 社会的養護における生活臨床と心理臨床. 福村出版, 101-115.
- 檀原真也・増沢高 (2012) : 児童福祉施設における心理職の歩み. 増沢高・青木紀久代 (編), 社会的養護における生活臨床と心理臨床. 福村出版, 27-40.
- 檀原真也 (2015) : 子ども虐待と治療的養育ー児童養護施設におけるライフストーリーワークの展開. 金剛出版.
- 西澤 哲 (1999) : トラウマの臨床心理学. 金剛出版.
- 大迫秀樹 (2001) : 児童虐待問題をめぐる現状と今後の課題. 九州大学教育社会学研究集録, 九州大学大学院人間環境学府, 3, 53-65.
- 大迫秀樹 (2017) : 社会的養護を要する児童に対する児童福祉施設の動向と今後の展望ー乳児院, 児童養護施設, 児童心理治療施設, 児童自立支援施設における被虐待児・発達障害児に対する治療的養育・心理的ケアの視点を中心に. 九州女子大学紀要, 54 (1), 35-52.
- 大迫秀樹・白澤早苗 (2019a) : 乳児院における乳幼児への早期からの連続性を持った心理的ケアに関する研究ー全国の乳児院の施設長・主任、及び心理職へのアンケート調査の結果より. 九州女子大学学術情報センター研究紀要, 2, 39-48.
- 大迫秀樹・白澤早苗 (2019b) : 児童養護施設における乳幼児への早期からの連続性を持った心理的ケアに関する研究ー全国の児童養護施設の施設長・主任、及び心理職へのアンケート調査の結果より. 九州女子大学学術情報センター研究紀要, 2, 49-58.
- 大迫秀樹・白澤早苗 (2021) : 乳児院における早期からの連続性を持った心理的ケアに関する実地インタビュー調査研究. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部, 22, 71-78.
- 大迫秀樹・白澤早苗 (2022) : 児童養護施設における早期からの連続性を持った心理的ケアに関する実地インタビュー調査研究. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部, 23, 23-29.
- 大迫秀樹・白澤早苗 (2023) : 乳児院における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケア. 福岡女学院大学大学院紀要 臨床心理学, 20, 37-44.
- 大迫秀樹・白澤早苗 (2024) : 児童養護施設における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケア. 福岡女学院大学大学院紀要 臨床心理学, 21, 1-10.
- Rose,R. & Philpot,T. (2005) : The Child's Own Story. Jessica Kingsley Publishers. (才村真理 <監訳>、浅野恭子・益田啓裕・徳永祥子訳 (2012) : わたしの物語 : トラウマを受けた子どもとのライフストーリーワーク. 福村出版.)
- 友田明美 (2017) : 子どもの脳を傷つける親たち. NHK出版新書.
- 坪井裕子 (2004) : ネグレクトされた女兒のプレイセラピーーネグレクト状況の再現と育ちなおし. 心理臨床学研究, 22 (1), 12-22.
- 渡辺久子 (2003) : 児童虐待と心的外傷. 臨床心理学, 金剛出版, 3 (6), 819-825.
- 山本朝美 (2012) : 心理職に求めるものー乳児院から. 増沢高・青木紀久代 (編), 社会的養護における生活臨床と心理臨床. 福村出版, 173-184.
- 山本智佳央・檀原真也・徳永祥子・平田修三 (2015) : ライフストーリーワーク入門ー社会的養護への導入・展開がわかる実践ガイド. 明石書店.
- 全国社会福祉協議会・全国乳児福祉協議会 (2009) : 乳児院養育指針. 全国乳児福祉協議会.

